

Feature: *The Lotus Sutra and the Silk Road*

## 特集【『法華経』とシルクロード】

■ 論文

## 梵文法華経のテキストに関する若干の問題

蔣 忠 新 訳／大江平和

膨大なインド仏教経典の中で、人類の思想に最も広く深い影響を及ぼす経典は『法華経』である。過去もしかり、現在もしかり、予期できる未来においてもまたしかりであろう。このようなわけで、近現代に入り、1820-30年代に B. H. Hodgson がネパールで『法華経』を含む大乘仏典の梵語写本を発見し、1837年、それらをフランスのアジア協会 (Société Asiatique) に送って以来<sup>(1)</sup>、『法華経』は国際仏教学界においてたえずひとかたならず重視されてきた。すでに1852年には、『法華経』は Eugène Burnouf によって直接梵語からフランス語に翻訳出版され<sup>(2)</sup>、一つのヨーロッパ言語に全文が翻訳された初の主要なインド仏教経典となった。その後、1884年 H. Kern もまた『法華経』を直接梵語から英語に翻訳出版した<sup>(3)</sup>。20世紀に入ってまもなく、大量の梵文『法華経』写本が次々と中国の新疆及びチベット地区やネパール王国各地、及びカシミールの Gilgit 地方から、それぞれロシア、イギリス、フランス、ドイツ、日本、アメリカやスウェーデンの様々な名称を掲げた視察隊あるいは探検隊によって発見され、本国に持ち帰られた。各国の学者は、これらの梵文『法華経』写本の保存、整理、研究作業に取り組み、すばらしい成果を収めた。多くの研究成果が出版され、近現代における梵文『法華経』の研究分野の一つを形成した<sup>(4)</sup>。

現在、人類がまもなく20世紀から21世紀に向かおうとする時にあたり、創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル会長である池田大作氏は次のように

述べている。「21世紀にむけての『法華経』の研究は、人類の英知を結集した『総合的法華学』の様相を呈することを期待したい。その学問的基盤を作るところに、法華経写本研究の根本的な意義が見いだされるのである<sup>(5)</sup>。」まさしく池田大作氏のこの言葉は学術界に対する強力な推進力であり、私個人の『法華経』研究においてはなおのこと、この上ない励ましである。ここで、私は「梵文法華経のテキストに関する若干の問題」と題して何点か最近の研究で得た成果を述べてみたい。

### I. 梵文『法華経』のテキストから『法華経』の起源地を考える

『法華経』の起源地に関して、学術界には主に二つの異なる意見がある。一つはインド西北部とする意見、もう一つはインド東部とする意見である。この二つの意見の相違は主に研究方法の相違から生じたようである。故岩本裕教授はこの点について簡単明瞭に紹介している<sup>(6)</sup>ので、参照されたい。私個人としては Heinrich Lüders と季羨林 (Hian-lin Dschi) が、現存する梵文『法華経』写本の中にみられる言語現象の比較研究を通して提示した仮説に賛成の立場をとっている。即ち、原初の『法華経』のテキストに使用されていた言語はインド東部の方言であり、『法華経』の起源地はインド東部である、というものである。

梵文『法華経』のいわゆる Kashgar 写本の第253, 254, 259及び260葉の4枚のテキストの言語現象を極めて仔細に研究したあと、Lüders は次のように指摘している。

From these facts we may safely conclude that the text of the Saddharmapundarika to which both the Central-Asian and the Nepalese MSS. go back, was written in a language that had far more prākritisms than either of the two versions. I am even inclined to believe that the original was written in a pure Prākrit dialect which was afterwards gradually put into Sanskrit. But I admit that the materials which are at present at our disposal are not sufficient to prove this; in fact, I do not see how it ever could be proved definitely except by discovering that Prākrit version itself. But apart from this question, we can, with the help of the fragment, determine the Prākrit dialect which must be at the bottom of the language of the

Saddharmapundarika. In 260 *b*<sup>iv</sup> we find a vocative plur. *kulaputrāho*. Vocatives in *-āho* from bases in *a* are found only in Māgadhi.<sup>1</sup> We may therefore assert that the original text of the Saddharmapundarika was written, if not in pure Māgadhi, in a 'mixed Sanskrit' which was based on that dialect.

(1 See Pischel, *Grammatik der Prākrit-Sprachen*, § 372.)<sup>(7)</sup>

Māgadhi (マガダ語) とは、インド東部の方言である<sup>(8)</sup>。

Lüders の上述の推定は、季羨林が相次いで発表したドイツ語による二編の論文によって有力な支持を得た<sup>(9)</sup>。初めの論文では、中期インド言語中の語尾 *-am* の *-o* と *-u* への変化が、中期インド西北方言の特徴であることを論証している。後の論文では、不定過去形 (aorist) が中期インド東部方言、即ち古代半マガダ語 (Alt-Ardhamāgadhi) の文法の特徴の一つであることを論証している。また、中期インド東部方言のその他の特徴として、以下の六点がある。(1) *-a* で終わる男性名詞複数呼格の語尾は *-āho* である (2) *eva > yeva* (3) 能動態 (parasmaipada) 現在の願望法 (optative) 単数第一人称の語尾は *-eham* で、第三人称の語尾は *-eha* である (4) *y > v* (5)  $\sqrt{bhū}$  という語根の能動態現在直説法 (indicative) 単数第三人称は *hoti* である (6) *-a* で終わる男性名詞複数主格と対格の語尾は *-āni* である。この二編の論文が、中期インド言語の地理的特徴を確定する根拠として用いたのは、アショカ大王碑銘の中の大石碑碑文に使われている言語である。この二編の論文の論点を基準として、梵文『法華経』のいわゆる Kashgar 写本を代表とする中央アジア伝本と、ネパール写本を代表とするネパール伝本とを研究すれば、梵語化の程度が比較的浅い、あるいは比較的古い中央アジア伝本の中には、上述のいくつかの東部方言の特徴が依然として保存されていることがわかるであろう。このことは原初の『法華経』は、間違いなく中期インド東部方言で説かれ、あるいは書かれたものであることを示している。そして、梵語化の程度が比較的大きい、あるいは比較的新しいネパール伝本の中においては、上述のいくつかの東部方言の特徴は消失してしまっている。と同時に、上述の中期インド西北方言の特徴を内包している。このことは、『法華経』がのちにインド西北部に流伝したことを示している。

資料の面では、Lüders と季羨林は当時、いわゆる Kashgar 写本と Kern-

Nanjio 校訂本<sup>(10)</sup>が提供する Kashgar 写本の読みしか使用できなかったが、現在、このいわゆる Kashgar 写本が代表するものは、梵文『法華経』中央アジア伝本の比較的新しいヴァージョンだけであり、のちに発見されたホータン写本が代表するものは、梵文『法華経』中央アジア伝本のさらに古いヴァージョンであることが証明されている。にもかかわらず Lüders と季羨林の『法華経』の起源をインド東部とする論点は、のちに発見されたさらに古い中央アジア伝本の検証に耐えうるであろうか。本文注(5)に引用した『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡・写真版及びローマ字版』という本の中の写本Aと写本Bに基づいて、私個人としてのこの問題に対する答えは肯定的である。この二つの写本の梵語化の程度は Kashgar 写本に比べてはるかに少なく、特に長行部分の俗語の成分が多いという点と、梵語化の程度が浅いという点については、Mahāvastu と同列に論じても全く問題ない。同時に、この二つの写本の中期インド東部方言の特徴も Kashgar 写本に比べて明らかに多い。詳しい状況については同書を参照されたい。以下に、写本Aと写本Bの中の不定過去形(aorist)の例のみを挙げ、それらを Kashgar 写本<sup>(11)</sup>中のもの、及び Kern-Nanjio 校訂本に使用されているネパール伝本の中の対応する読みと対比し、その根拠としたい。

| MS A & B             | Kashgar MS<br>(Toda's edition) | Kn edition               |
|----------------------|--------------------------------|--------------------------|
| karinsu A-2V1        | karinsu 57a5                   | karonti 50.8             |
| karin(su) A-2V2      | karimsu 57a7                   | kārayanti 50.10          |
| (prak)āśayinsu A-6R9 | prakāśayinsu 186b6             | abhāṣi 194.3             |
| avocuḥ A-13R3        | avocu(h) 294b5                 | ūcuḥ 307.9               |
| (av)o[cuḥ] A-13R4    | avocu(h) 294b7-295a1           | ūcuḥ 307.11              |
| bhāṣīt* A-13R8       | abhāṣata 295b4                 | abhāṣata 308.7           |
| (sa)mutejesi A-17R2  | (samutteja)yāmāsa<br>438b6     | samuttejayati<br>464.12  |
| (pravraj)īṣu A-17R5  | (missing)                      | pravrajitāḥ 465.3        |
| paryodaveṣi A-17R6   | paryavadānīm kurute<br>439a7   | paryavadāpayam*<br>465.5 |
| abhū(ṣ)[ī] B-6V10    | babhūva 153a7                  | abhūd 159.9              |

|                               |  |                            |
|-------------------------------|--|----------------------------|
| (abh)ūṣi B-7R(4)              | babhūva 190a1                                    | abhūt* 199.4               |
| lābhī-m-abh(ūṣi)<br>B-7V(5)   | lābhī babhūva 191a6                              | abhūt* 200.11              |
| av(o)cat* B-8R6               | āhu 199b2  | āhuḥ 210.1                 |
| bhāṣi B-8V8                   | babhāṣu(h) 202a1                                 | abhāṣanta 212.4            |
| bhāṣi B-10V2                  | abhāṣata 217a2                                   | abhāṣata 228.3             |
| abhūṣi B-11V2                 | babhūva 228b5                                    | abhūt* 240.15              |
| (a)k(a)rṣi B-17R10            | akārṣīt* 428a6                                   | kṛtavān 446.8              |
| upanāme[si] B-17V1            | upanāmayā(māsa)<br>428b1                         | samupanāmayāmāsa<br>446.10 |
| bhāṣi B-18R8                  | (missing)  | bhāṣate sma 398.3-4        |
| [a]vocat* B-18R10             | the last two syllables<br>are missing in 383b2-3 | avocat* 398.8              |
| tenô(pasaṃ)[kkramī]<br>B-18V7 | missing in 384b7                                 | tenôpasaṃkrātā(h)<br>400.8 |

要するに、写本Aと写本Bには、不定過去形(aorist)しかなく、一つの aha を除いて動詞の完了形(perfect)は皆無である。この二つの写本は著しく損傷しているとはいえ、先に挙げた例は問題を説明するには十分であろう。それと同時に、写本Aと写本Bの中に、語尾 -am の -o と -u への変化現象が存在しないということは、最も早く中央アジアに伝播した現存する梵文『法華経』が、この西北方言の文法的特徴の影響をまだ受けていなかったことを示している。

また、辛嶋静志博士は、最近の力作「法華経梵本の原典批判覚書」の中で次のような指摘をしている。

上述の写本Bを代表とする梵文『法華経』の最古の中央アジア伝本の中に、一連の東部方言の特徴をもつ語句がある。例えば、bhikṣu(比丘)の複数呼格は bhikṣave であること、古典梵語 tad-yathā に対応するのが, sād-yathā, syād-yathā, 古典梵語 trāyastriṃśa~あるいは trayastriṃśa~に対応するのが tāvatrīśa~, 「父親」という意味をもつ bhāpa という語等である。現在、辛嶋静志博士は説出世部の文献 Ābhisamācārikā の校訂とドイツ語への翻訳作業に取り組みられているが、氏は『法華経』の原初のテキスト(Urtext)の言語と大衆部説出世部の文献の言語は類似するとも指摘している。

私は氏のこれらの意見はいずれも注目に値するものだと思う<sup>(12)</sup>。概言すれば、Lüders と季羨林の『法華経』の起源をインド東部とする論点は、最近『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡・写真版及びローマ字版』で公にされた写本Aと写本Bによって有力な支持を得たのである。

## II. 梵文『法華経』のテキストから『法華経』の流传を考える

現存する梵文『法華経』写本は、書写地によってネパール写本、カシミールあるいは Gilgit 写本、及び中央アジア写本に区分される。ネパール写本とカシミールあるいは Gilgit 写本は同一伝本、即ちカシミール=ネパール伝本に属すると考えられる。中央アジア写本及び伝本は、Kashgar 写本を代表とする中央アジア新伝本と、旅順博物館所蔵写本A及び写本Bを代表とする中央アジア古伝本に区分される。現在に至るまで我々は、これらの写本の中の東部方言の特徴と西北方言の特徴だけにしか注意を払わなかったため、『法華経』がインド東部を起源とし、その後インド西北部に伝わり、それからインド西北部から中央アジア地域等に流传したことだけしか推断できない。この見解に誤りはないが、仔細に研究してみれば、梵文『法華経』のテキストに基づいて『法華経』の流传に関して新たな補足的意見を提示することができよう。

梵文『法華経』写本研究に携わる学者諸氏にとってはすでに周知のことであるが、Gilgit 写本AグループとBグループ<sup>(13)</sup>、及び Kashgar 写本の中に、Śāradvatīputra という語がある。これは Śāriputra と同義語である。この語は上述の三つの写本の第一章から第三章の中で Śāriputra と並行して使用されているが、その使用回数は同一ではない。この語はこれまで公刊されたネパール写本の中には見当たらない。しかし、『法華経』のチベット語訳の中にはこの語の音訳、すなわち *sā ra dva tihi bu* (T14b)<sup>(14)</sup> が存在するのである。

Śāradvatīputra という語は、仏典中に使用されている梵語の一つとして辞典の中に取り上げられているが、その方言的特徴については説明されていない。たとえば、

1. Śāradvatī, f. patr. of Kripī, Mbh.; N. of an Apsaras, ib.; Hariv. -putra, m. = *sāri-putra*, Buddh. (Sir Monier Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford 1899; reprint: Tokyo 1986, p. 1066, col. 2.)

2. Śāradvatīputra (not in Pali) = Śāriputra: Divy 361.16; 395.3, 4; Av i.213.9; ii.154.6; Śikṣ 158.8; 287.6 (here text Sār°); Karmav 55.20; ŚsP 55.17 etc. (common here); Jm 115.22; acc. to Kern, SP Preface ix, in Kashgar rec. of SP (spelled Sār°, doubtless by error). Nearly all these prose. (Franklin Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, volume II: Dictionary*, first edition: New Haven 1953; reprint: Delhi 1970, 1972, 1977, 1985; p. 526, q.v.)

3. Śāradvatī-putra 男 漢訳 音写 [人名] 舍利弗, 舍利子 *Av-ś., Bodh-bh., Divy., Madhy-v., Sapṭ-pr., Śikṣ.* (『漢訳対照梵和大辞典』, 新装版, 1990年5月25日第五刷発行, p. 1323, q.v.)

以上は Śāradvatīputra という語について辞典に説明されている内容である。しかしながら、少し前私はあることに気付いた。それは、Th. Damsteegt がその著 *Epigraphical Hybrid Sanskrit* (Leiden, 1978, pp. 263-4) の中で、Mathurā 方言特有の語は、仏教混淆梵語 (BHS) の中において他のどの方言特有の語よりも多く見受けられる。そして、人名 Śāradvatīputra は Mathurā 方言特有の語であり、同時にそれは Śāriputra の同義語として仏教混淆梵語の中にだけ存在する、と指摘しているということである。ゆえに、梵文『法華経』 Gilgit 写本の中の Śāradvatīputra という語は、『法華経』のカシミール=ネパール伝本が、まず北インド中部の Mathurā 方言の地域に伝わり、その後そこからインド西北部に入り、最後にインド西北部を経て中央アジア地域に伝わったことを示している。『法華経』のチベット語訳は Gilgit 写本から来たため、この語の音訳が存在するのである。Th. Damsteegt はさらに梵語化の問題についても触れているが、私はこの点もきわめて意義深く、注目に値すると思う。

『法華経』 Kashgar 写本の最初の三章の中には、Śāradvatīputra という読みが数多く存在する。と同時に、Kashgar 写本の中には動詞の完了形 (perfect) が比較的多く、aha 以外に動詞の完了形が存在しない中央アジア古伝本中の状況と対比することはもはやできない。言い換えれば、つまり Kashgar 写本のテキストの梵語化は程度が進んでいるということである。このような現象とその他のいくつかの現象は、中央アジア伝本としての Kashgar 写本が確かに中央アジア古伝本を新しくした改訂本であることを示している。Kashgar 写本の

(8)

書写年代が西暦9-10世紀<sup>(15)</sup>であることから、改訂される過程で西暦7世紀以前に書写された Gilgit 写本の影響を受けたため、この写本が Śāradvatīputra という語を採用したであろうことは、十分に可能なことである。しかし、総体的に言って、この新しい改訂本は中央アジア古伝本のいくつかの基本的な特徴を残している。偈頌部分においては特にそうである。この写本は依然として中央アジア伝本に属しており、カシミール=ネパール伝本とは明確な文献学的相違がある。以下に、ネパール写本を代表する Kern-Nanjio 校訂本、Gilgit 写本 b (Watanabe 本)、Kashgar 写本 (Toda 本)、及び旅順博物館所蔵写本 A (筆者編本) (順に Kn, Gb, O 及び A の略号を用いる) の中から三つの例を挙げてこの問題を説明したい。この三つの例は、いずれも第二章から取った。

例一：

Kn dānaṃ ca dattaṃ caritaṃ ca śīlaṃ kṣāntīyā ca sampādita sarvaca-  
ryāh // 75 //

Gb dānaṃ ca dattaṃ caritā ca śīle kṣāntīyā ca sampādita sarva-caryām // [75]

O datta(m) ca dānaṃ caritaṃ ca śīlaṃ kṣānti(ś) ca sampādita brahmaca-  
ryamm\* 38

A ++++++++ /// (śī)la kṣāntī (ca sampā)dita bra .. ++ (38)

例二：

Kn nānādhimuktāṃś ca viditva sattvān nānābhinihārupadarśayanti // 107 //

Gb nānādhimuktāṃś ca viditva sattvā nānābhinihār'upadarśayanti // [107]

O nānādhimuktiś ca viditva satvām nānābhinihāra pradarśayanti (71)

A ++++++++ /// (nānābhi)nirhāra p(r)adarśa(yanti) 71

例三：

Kn śreyo mama naiva kadāci bhāṣituṃ adyaiva me nirvṛtir astu śāntā // 117 //

Gb śreyaṃ mama naivaṃ kadāci bhāṣituṃ adyaiva me nirvṛtir astu śā-  
ntā // [117]

O śreyo mama naiva kadāci bhāṣitu(m) adyēva me nirvṛtu bhotu kṣi-  
pram (81)

A śr(e)yo mama naiva kadāci +++++ me ni[rvṛ]ti [bottu kṣ](i) /// +  
(81)

以上の引用文中の下線は、読者が一目でカシミール=ネパール伝本と中央アジア伝本との区別がつくように、私を加えたものである。中央アジア古伝本の偈頌の順序を表す番号さえも Kashgar 写本という改訂された中央アジア新伝本に完全に継承されている。しかもこのような番号はカシミール=ネパール伝本の各写本の中にはもともと付いていなかったものである。現在見受けられるこれらの番号は、それぞれの編者によって加えられたものである。この一例だけをとりても梵文『法華經』の二つの伝本の相違を説明するのに役立つであろう。

梵文『法華經』のテキストの変化から、『法華經』の広範囲にわたる流伝の過程は、絶えず時代と地域に適應しながら変化してきた過程であったことがうかがえる。『法華經』の漢訳の歴史も同じようにこの特徴を一步進めて説明するのに役立つであろう。南條文雄と泉芳環共訳の『梵漢対照新訳法華經』(法蔵館、京都 大正3年5月15日再版、pp. 5-6) にもとづき、私はまず法華經の漢訳本の状況を以下に紹介したい。

第一訳(闕)『仏以三車喚經』一卷

吳月支優婆塞支謙訳(西暦223-253年)

第二訳(闕)『法華三昧經』六卷

吳外国三蔵支彊良接訳(西暦255あるいは256年)

第三訳(闕)『薩芸芬陀利經』六卷

西晋三蔵竺法護訳(西暦266-274年)

第四訳(存)『正法華經』十卷

西晋月支国三蔵竺法護訳(西暦286年)

第五訳(存)『薩曇分陀利經』一卷

失訳人名今附西晋録(西暦265-316年)

第六訳(闕)『方等法華經』五卷

東晋沙門支道根訳(西暦335年)

第七訳(存)『妙法蓮華經』八卷 二十八品 あるいは七卷

姚秦龜茲国三蔵法師鳩摩羅什訳(西暦406年)

第八訳(存)『添品妙法蓮華經』七卷 二十七品 あるいは八卷

隋天竺三蔵闍那崛多共笈多訳(西暦601年)

4世紀の間に、『法華經』がシルクロード沿いの月支、天竺及び龜茲といった諸国出身の優婆塞(在家者、居士)や沙門(出家者)によって、実に八回もの多きにわたって漢訳されたのである。もし、現存する中央アジア古伝本が第七訳の『妙法蓮華經』に近く、Gilgit写本が第八訳の『添品妙法蓮華經』に近いとすれば、それ以前の六つの漢訳本の原本を我々がまだ目にすることがないという事実は、『法華經』の伝本の種類は現存する種類よりもはるかに多く、『法華經』がインドから中央アジアに向かって一回また一回と流伝していった頻度は、我々が現存する梵文写本に基づいて推定できる程度よりもはるかに多かったに違いないことを示しているのである。

### III. 梵文『法華經』の再校訂は21世紀初頭の課題

近現代における梵文『法華經』のテキストの研究は大きく初期段階、発展段階及び成熟段階という三段階に分けられる。すなわち、(1)19世紀、梵文『法華經』のネパール写本がいくつか発見され、梵文『法華經』がフランス語と英語に翻訳出版された。これが初期段階である。(2)20世紀、梵文『法華經』は南條文雄とH. Kernによって校訂、出版された。梵文『法華經』の中央アジア写本、カシミール写本及びネパール写本がそれぞれ中国新疆地区、Gilgit、ネパール王国及び中国チベット自治区内で数多く発見された。これらの写本の解読、考訂、校勘、研究及び翻訳といった作業が全面的に繰り広げられ、次第に深まり、優れた成果を収めた。これらの成果を反映した参考文献の目録がすでに編集出版されており、しかも追加補訂が待たれている。梵文『法華經』研究はすでに一つの専門研究領域となった。これが発展段階である。(3)1994年の初め、創価学会が「法華經写本シリーズ」出版計画を発表し、しかもすでに実行に移し、満足すべき成果を収めている。1997年の初め、創価大学は国際仏教学界の認める一流の学者で、『法華經』を研究している専門家たちを招聘し、国際仏教学高等研究所を設立、法華經研究のための幅広い、堅実な学術的基礎を提供している。この二つの出来事は世の注目を集めた。まさに21世紀に向けて梵文『法華經』のテキスト研究の成熟段階の良好なスタートを切ったといえよう。

このような時にあたり私は、21世紀初頭の課題として梵文『法華經』テキストの再校訂作業を行うべきであるとの提案をすることは、きわめて自然、かつ

重要なことであると考え。私自身浅学非才であることを承知の上で、以下に一石を投じる意味からいくつか意見を述べ、各界の関係者の批評と指教を仰ぎたいと心から願っている。

周知の通り、南條文雄とH. Kernの校訂による梵文『法華經』が1908年に世に出てから今日に至るまでちょうど90年の歳月が流れた。当時、校訂者が入手できる写本の数量に限りがあったことと、特に校訂者が中央アジア写本とネパール写本との間の文献学上の重要な相違に気付かなかったことにより、この校訂本には多くの文献学上の混淆現象が生じた。この校訂本は今なお使用されているとはいえ、厳格な学者はそれを使用する際には並行して多くの写本のローマ字版と写真版とを調べざるを得ず、そのための労苦と困難は想像するに難くない。また『法華經』という過去、現在及び未来の人類の思想史において重要な意義を有する経典からみれば、これまで適格とするに足る梵文の批判的校訂本(critical edition)が皆無であったという状況は、宗教の面からみても純粹に学術の面からみてもそぐわないこと甚だしい。ゆえに、私はあえて、21世紀のニーズに応えるためにも、「法華經写本シリーズ」の出版作業に全力で取り組みながら、時を移さず梵文『法華經』の批判的校訂本の出版を計画することを提案したい。

もし梵文『法華經』のテキストを再校訂する必要性が、何ら疑いの余地なきことであるとすれば、上述のようにする可能性も同じく何ら疑いの余地なきことなのである。なぜなら、さしあたって未公開の極少数のものを除いて、これまで知られている梵文『法華經』写本及び断簡はすべて写真として発表されている。しかも戸田宏文教授等の学者の尽力により、その中のかなりの部分はすでにローマ字に転写、出版されている。ゆえに、資料の面では、梵文『法華經』テキストを再校訂する条件はすでに整っているといえる。検討すべき学術に関する問題は、おそらく主に校訂の方法あるいは構成の問題、特にどの写本を採用して底本とするかの問題であろう。向こう見ずではあるが、以下に私の校訂、構成に関する構想をかいつまんで述べてみたい。

現代の学者諸氏は一様に、梵文『法華經』の中央アジア伝本は必ずカシミール=ネパール伝本と分けて校訂すべきであり、中央アジア伝本はどの写本も破損が激しすぎるために、それを使って完全なテキストを校訂することは不可能であると考えている。ゆえに、今のところ我々はカシミール=ネパール伝本の

校訂、構成の問題しか検討することはできない。まず私はカシミール写本を底本として、一部選択した古いネパール写本を参校本として使用し、参校本と底本の読みが異なる場合については校訂の注記に記すことを主張したい。カシミール写本の内容は保存されている部分が多いため、カシミール写本を底本として使用し終えた段階で、校訂の注記を使って分析を加え、帰納すれば、比較的正確にカシミール写本に最も類似するいくつかのネパール写本が明らかになるであろうと確信する。そのあと、カシミール写本の欠損部分を補うため、再度ネパール写本の中から一つの写本を選んで底本とし、選ばれなかったその他のネパール写本は校訂が完了するまで参校本として使用する。私のこの主張の基本的理由の一つは、梵文『法華経』のカシミール写本とネパール写本との間には、文献学上の顕著な相違はないこと。二つ目の理由は、カシミール写本の書写年代はネパール写本に比べはるかに古いことが挙げられる。上述の方法を説明するため、以下に第16章第1偈を例として一つの見本を示し、読者の参考に供したい。

テキスト<sup>(6)</sup>:

āścarya-dharmaḥ sugatena<sup>1</sup> śrāvito<sup>2</sup>  
 na<sup>3</sup> jātu asmābhi<sup>3</sup> śrut'<sup>4</sup> eṣa<sup>4</sup> pūrvam [/  
 mahātmatā<sup>5</sup> yādṛśu<sup>6</sup> nāyakānām  
 āyuspramāṇam<sup>7</sup> ca yathā<sup>8</sup> anantakam<sup>9</sup> // [1]

校勘記<sup>(7)</sup>:

- 1 āścaryaprāpto, R; āścaryadharmaparyāyaṃ tena, N1; So, all other MSS.
- 2 So, R, K, T6, N2, N3, T8, A1; bhāṣito, C4, T2, N1, Pe; deśito, C5, C6.
- 3 So, T2; jātu-r-asmābhi, R, C4, T6, N1, N2, N3, Pe, T8; jātu-r-asmābhiḥ, K; jātu asmābhiḥ, C5, C6.
- 4 So, R, A1; śrutaiṣu, T8; śrutaisa N1; śrutaiṣa, all other MSS.
- 5 mahātmanā, N3, T8; mahātmakā, Pe; kohātmatā, A1; mahātmanām, T2; So, all other MSS.

- 6 yādṛśi, R, K, T6, N3, T8; māḍṛśi, T2; yādiśi, C5, C6; yādṛsa, N2; yādṛśa, C4, N1, Pe, A1.
- 7 So, N3, Pe, T8; āyuspramāṇāṃ, C5, C6; °ṇaṃ, K, C4, T2, T6, N1, N2; °naṃ, R; āyuppramāṇāṃ, A1.
- 8 tathā, C5, C6, T2.
- 9 anantakam, C4, Pe.

Abbreviations:

- R: MS no. 6, Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London  
 K: Kawaguchi's MS, Toyo Bunko, Tokyo  
 C4: Add. no. 1683, University of Cambridge Library  
 C5: Add. no. 1684, University of Cambridge Library  
 C6: Add. no. 2197, University of Cambridge Library  
 T2: MS no. 408, University of Tokyo Library  
 T6: MS no. 412, University of Tokyo Library  
 N1: MS no. 4-21, National Archives of Nepal  
 N2: MS no. 3-672, National Archives of Nepal  
 N3: MS no. 5-144, National Archives of Nepal  
 Pe: MS no. 0004, Cultural Palace of the Nationalities, Beijing  
 T8: MS no. 414, University of Tokyo Library  
 A1: MS no. 4079, Asiatic Society of Bengal, Calcutta

疑う余地もなく、梵文『法華経』のカシミール=ネパール伝本の批判的校訂本 (critical edition) を編集し、出版することは決してたやすいことではないし、短時間で完成できる仕事ではない。私はここではきわめて概略的に述べたが、検討すべきでありながら触れなかった問題は他にもたくさんある。たとえば、チベット語訳と漢訳をどのように参考にするのかという問題、また、たとえばカシミール写本と最古のネパール写本は、いずれも二つ、あるいはさらに多くの sub-group に分けられる可能性もあり、このような状況に遭遇した時、どのように底本を選択すべきであるか、これも慎重に考慮すべき問題である。当然このような重大な仕事を完成させようとするなら、学術面における準備だけでなく、財政面や組織面等においても周到な用意が必要となる。とりわけ有

識者による力強い支持を得なければならないであろう。などなど色々あるが、ここで事細かに述べるのは難しい。

1999年1月20日  
北京にて

## 注記

- (1) William Wilson Hunter, *Life of Brian Houghton Hodgson, British Resident at the Court of Nepal, Member of the Institute of France; Fellow of the Royal Society; a Vice-President of the Royal Asiatic Society, etc.*, London 1896;  
J. W. de Jong, *A Brief History of Buddhist Studies in Europe and America*, first English edition, Kōsei Publishing Co., Tokyo 1997, p. 24 を参照。
- (2) Eugène Burnouf, *Le Lotus de la Bonne Loi, traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au Bouddhisme*, Paris 1852.
- (3) H. Kern, *The Saddharmapūṇḍarīka or the Lotus of the True Law (= The Sacred Books of the East Series, vol. 21)* Oxford 1884 (repr. 1965, 1980, Delhi).
- (4) 詳しくは次の文献を参照のこと:  
Akira Yuyama, *A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapūṇḍarīkasūtra*, Canberra, 1970;  
湯山 明, 「法華経の文献学の研究課題」, 『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』平成9年度(創刊号) / *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, for the Academic Year 1997, pp. 29-47;  
戸田宏文, 「法華経原典研究の現況と課題」(平成9年度 前期公開講演会抄録), 『佛教大学総合研究所報』No. 13 (1997年12月, pp. 13-16).
- (5) 拙編『旅順博物館所蔵梵文法華経断簡・写真版及びローマ字版』, 旅順博物館・創価学会, 1997, pp. xvi, xviii, xx から引用。
- (6) 岩本裕, 「解題『法華経』のサンスクリット語原典」, 『法華経』(上) (坂本幸男, 岩本裕訳注) 岩波書店, 1993年7月15日第34刷発行, pp. 407-443.
- (7) A. F. R. Hoernle, *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*, Oxford 1916, pp. 161-162 から引用。
- (8) この問題についての詳しい論述は次を参照のこと:  
Lüders, H. and Ernst Waldschmidt, eds., *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons*. Berlin: Akademie-Verlag, 1954.
- (9) 1. Hiän-lin Dschi, Die Umwandlung der Endung -am in -o und -u im Mittelin-dischen, *NAWG Jahrgang* 1944 Nr. 6;

2. Hiän-lin Dschi, Die Verwendung des Aorists als Kriterium für Alter und Ursprung buddhistischer Texte, *NAWG Jahrgang* 1949 Nr. 10.
- (10) H. Kern and B. Nanjio, *Saddharmapūṇḍarīka (= Bibliotheca Buddhica X)*, St. Petersburg 1908-12.
- (11) Hirofumi Toda, *Saddharmapūṇḍarīkasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text*, Tokushima, Kyoiku Shuppan Center, 1983 を参照。
- (12) 詳しい状況については、先に引用した『創価大学・国際仏教学高等研究所年報』平成9年度(創刊号) / *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, for the Academic Year 1997, pp. 49-68 を参照のこと。
- (13) Shoko Watanabe, *Saddharmapūṇḍarīka Manuscripts Found in Gilgit, Part Two, Romanized Text*, the Reiyukai, Tokyo 1975.
- (14) *Index to the Saddharmapūṇḍarīkasūtra*, Fascicle X, Tokyo, the Reiyukai, 1992, p. 978 から引用。
- (15) 注(11)で引用した文献, Introduction, p. xii を参照。
- (16) テキストは注(13)で引用した文献, p. 120から引用。
- (17) 校勘記の根拠は、戸田宏文, A Classification of the Nepalese Manuscripts of the Saddharmapūṇḍarīkasūtra (12), 『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』第2巻1995, pp. 105-6. なお、戸田教授は1999年4月までの時点でこの内容に若干の修正を行っている。本校勘記にはそれを用いた。

(しょう ちゅうしん/中国社会科学院アジア太平洋研究所研究員)  
(訳・おおえ へいわ/通訳)